

Alice Walker の *The Third Life of Grange Copeland* について*

——ステレオタイプからの脱出への模索——

前 川 裕 治

A Study of Alice Walker's *The Third Life of Grange Copeland*

Yuji MAEKAWA

Abstract

The Third Life of Grange Copeland was published by Alice Walker in 1970. This is her first novel, in which she tries to verify how black women have been oppressed. In order to do this, she makes an analysis of their historical roles, which were played by black women but which black women were forced to play by the white and men. In addition to this, Alice Walker seems to think that black women, in a sense, forced themselves to play their historical roles, too. In this article, these historical roles are called "stereotype." First of all, in this paper, people with this "stereotype" are introduced and analyzed. Secondly, possibility of getting out of this "stereotype" is discussed. Finally, how and what Alice Walker thinks to do in order to survive in this world is explained.

I. は じ め に

アメリカに於ける Feminism 運動は1960年代前半に始まったとされている。中でも1963年に Betty Friedan の *Feminine Mystique* が当時の白人の中産階級の悩める女性の姿をよく描き出していて、いわば、悩める女性の代弁者の役割をしていたといわれている。こういう女性意識の高まりには社会的背景がある。1960年代にはアメリカではいわゆる公民権運動が盛り上がりの頂点に達し、黒人とか被抑圧者達の人間性回復が強く主張された時代であり、抑圧の社会構造や心的構造が解明されていく方向性にあり、人間の中にある主従の関係とか上下の関係、保守的画一性などの傾向を持つ社会的状況に眼を向けられていった。その中に女性の差別に関する問題が含まれていったということは不思議な事ではない。特に1974年には公民権法が成立し、黒人の日常的差別の撤廃が法律的に宣言されたが、その中に女性差別撤廃の条項も含まれていたのである。こういう中で「全米女性連盟」(National Organization for Women)が1964年に結成され Women's Lib の先駆けとなっていった。こういう女性が差別されているという意

識は黒人女性達の中にもあった。特に1960年代に盛んになった Black Power 運動の中心的役割を果たしたブラック・モスリムは男性優位主義で男は戦うもの、女は男に服従するもの、優しく、家事や育児に専念し、従順なセックスの相手になるべしという考え方を持っていた。黒人女性の活動家はこういった女性の差別に対して戦い、Black Feminist 運動を展開していく。その組織的運動としては1973年に「ブラック・フェミニスト全国組織」(Black Feminist Natinal Organization) が結成され1977年には Black Feminist 宣言が出されることになった。

Alice Walker はこういう流れの中で登場した作家である。彼女の意識の出発は黒人として疎外されていることに対する反発にある。即ち、黒人であるが故に社会の中で差別され、非人間的な扱いを受けていることに対して戦っていかうとする態度である。更に、今上に述べたような社会的流れの中で彼女の関心の対象になっていくことは、女性として疎外されていることに対してである。女は男によって造られた“女性像”即ち、女のステレオタイプを押し付けられていて、その通りに行動することを強いられていると考えるようになっていく。即ち、考え方のパターンとしては、黒人に対する白人の差別が行われるのと同じ意識構造、同じレベルをもって、女性に対する男性の差別を捉まえようとしていた。

本論で取り上げる *The Third Life of Grange Copeland* は1970年の出版で、黒人フェミニズム運動が組織される数年前だが、当時の黒人フェミニズム運動の関心の中心を知ることができる。本論では、まず黒人女性がどのような“女性像”を押しつけられ、実践していったかが論じられ、次にそのステレオタイプから脱出する事は出来るのかについて論じる。最後に Ruth を中心にこういう差別や疎外社会の中で生き残って行くにはどうあるべきだと作者 Walker は考えているのかについて考察してみる。

II. 男と女のステレオタイプ

Richard Wright は *Uncle Tom's Children* の最初のところで次の様に言っている。

The post Civil War household word among—“He’s an Uncle Tom!”—which denoted reluctant toleration for the crying type who knew his place before white folk, has been supplanted by a new word from another generation which says—“Uncle Tom is dead!” (Wright 1938)

Richard Wright はこの短編集により、旧来の白人に追従する、従順な黒人男性像を否定し、戦う黒人男性像を前面に押し出していった。それが黒人抗議文学の象徴的な始まりであったことはよく知られている。ライトはこの短編集の中で、まず戦う黒人像の基礎を築き、*Native*

Son に至りその戦いを現実の場で *Bigger Thomas* にさらに強烈に演じさせた。こうして *Native Son* で抗議が最高潮に達した訳だ。

黒人文学の女性の面を振り返ってみると、そこには黒人男性に対して分析され得る二つのステレオタイプと同じものを見いだす事が出来る。即ち、黒人男性の場合は *Uncle Tom* という言葉で持って、白人に対して、追従的な、いわば白人にとって好ましい存在が表現されていたのに対して、黒人女性の場合は *Aunt Jemima* という言葉で表現された¹⁾。 *Aunt Jemima* とはシロップの商標に使われたものらしいが、白人の台所を預かる料理女のイメージを持っていて、白人に対して従順で、口応え一つしない、白人にとって極めて好ましい黒人女を表現する言葉であった。黒人側からいえば、白人の言うどんなことに対しても「はい、はい」と答える女性のことで、蔑称的な意味合いを持っていたのである。

Aunt Jemima が否定的に扱われる意味は、*Uncle Tom* が否定的に扱われるのと同じ意味を持っている。*Uncle Tom* 像を否定する黒人像として登場したのが *Bigger Thomas* 像²⁾ であるように、*Aunt Jemima* を否定するタイプが *Sapphire* といわれる黒人女性の姿である。他にも *the Rock of Gibraltar* (Russell 1982: 25) と呼ばれる場合もあるが、これらの黒人女性像は言わば「強い黒人女」を代表する言葉として使われた³⁾。

Gibraltar は難攻不落の *Gibraltar* 海峡のことであり、*Sapphire* というのは1930～1935年のラジオの人気番組の '*Amos and Andy*' の中に登場する黒人女の事で、有能で、強い意志を持ち、黒人男を軽蔑的に扱ったり、威圧したりする強い黒人女で、白人に対してもかなり手厳しい態度を示したようである。

Sapphire のようないわゆる「強い女」がうまれてくるには社会的状況から見て必然性があったといえる。即ち、黒人社会の中で、黒人男性は一人前の男として存在することを押さえ付けられているところが有ったために⁴⁾、男に変わる役割を果たす存在として「強い女性」が必要だったのである。こういった女性は母親の場合父親に代わって家庭の一切を取り仕切り精神的にも肉体的にも一家の大黒柱としての役割を果たしたのである。

黒人男性の場合は *Uncle Tom* という一つのステレオタイプがありそれを否定する形で *Bigger Thomas* がいた。黒人女性の場合は *Aunt Jemima* がいて、それとは対照的なステレオタイプとして *Sapphire* がいた。ところが、*ボールドウィン* は *Bigger Thomas* も *Uncle Tom* も同じように否定する。まず *ボールドウィン* の否定の弁を見てみよう。

All of Bigger's life is controlled, defined by his hatred and his fear. And later, his fear drives him to murder and his hatred to rape; he dies, having come, through this violence, we are told, for the first time, to a kind of life, having for the first time

redeemed his manhood. Below the surface of this novel there lies, as it seems to me, a continuation, a complement of that monstrous legend it was written to destroy. Bigger is Uncle Tom's descendant, flesh of his flesh,... (Baldwin 1955: 17)

ボールドウインの主張は Uncle Tom も Bigger Thomas も、白人の作り出した黒人像を演じているという点で裏返しの一つの存在に過ぎない、従順であろうと反抗的であろうと白人の基準に従って行動している黒人であることには変わりはないとする考え方なのである。

このボールドウインの考え方を黒人女性にもそのまま当てはめて考えることが出来る。Aunt Jemima も Sapphire も歴史的にも現実的にも、白人を補うための存在に過ぎなかった。南部の白人女性には、歴史的に、特に、肉体的にも精神的にも繊細で、ひ弱で、労働に不向きで、それでいて美しく、臆病で、性欲などには無縁な存在であることが期待された訳であるが、こういう白人女性を補う役を黒人女性が担っていたのだ。本来白人の妻や母である女性がすべきところを黒人の女性が——なかでも歴史的には house nigger とか house slave と呼ばれた黒人女性が——肩代わりした訳で、そうするために黒人女性の期待される姿は、頑丈で、忍耐強く、力強く、太っていて、性的にも情熱的であることだった。Aunt Jemima も Sapphire も白人の基準に従った、白人の期待する、白人の考える黒人女性の姿であることが分かる。

Aunt Jemima も Sapphire も共に母親のイメージであり、「マミー」像と呼ぶことが出来る。これに対して黒人女性のイメージとして強制されていたものがもう一つある。それは「娼婦」像である。マミー像として Aunt Jemima や Sapphire が白人女性を補うための強制的な姿であったのと同じ意味で娼婦像も白人女性を補うための強制的な姿であったといえる。南部の期待される白人の淑女のタイプの特徴は、上記したように、肉体的精神的弱さであり、この弱さがマミーで黒人女性によりカバーされ、その弱さ故に夫の中に生まれるフラストレーションの排け口を甘受する役を黒人女性が強いられたといえる。その排け口であるにしても、白人男性の相手となり、白人女性の肩代わりになる黒人女性が正当な人間であって、白人にとっては不都合であったので、いわゆる娼婦というイメージを作り出し、白人は自らの中に生まれる罪悪感を弱め、外面を整えようとしたといえる。

性的視点という意味では黒人男性も黒人女性も同じイメージを課せられていたといえる。黒人男性の場合は黒人女性のように娼婦といったステレオタイプを課せられていた訳ではないが、考え方のパターンとして似たものがあつた。それは黒人男性の性的能力についてよく言われたことであるが、黒人男性は白人男性より性的に強いと考えられていた。(何の根拠もあつた訳ではないが、そういうふうに白人は考えていた訳である。) その黒人男性の性的強さに対して、白人男性の言い分は、黒人男性は正当な人間ではなく、動物みたいなものなので強くて

当たり前だというものである。黒人男性を動物視することによって、白人男性は自らの中にある、性的な劣等意識を払しょくしようとした訳であり、黒人女性を娼婦視することによって、白人男性は黒人女性を性的にもてあそぶことに対して言い訳がたち、白人女性にとっては自分の夫が黒人女性に性的満足を感じるということに対して体面を汚されることがないのである。

Ⅲ. ステレオタイプに陥ってる人達

今まで黒人女性や黒人男性の一般的な一つの固定したイメージ、即ち、ステレオタイプについてみてきた。このステレオタイプに陥ってる *The Third Life of Grange Copeland* の登場人物を次にみていきたいと思っている。その本題に入る前にまず、「ステレオタイプに陥ってる」という時の意味について考えて見る。

「ステレオタイプに陥っている」という時には、不可分のものではあるが、二つの意味がある。その一つはステレオタイプをもってして相手を見ている時である。例えば、これは黒人女性とはこんな姿であって欲しいとか、あるべきだというイメージをもって、それを相手に対して期待し、更にはそのイメージを強制する時、しかもそのイメージが Aunt Jemima や Sapphire や娼婦のように一応の社会通念として、当然の姿として考えられている時、その人の中にはステレオタイプがあり、ステレオタイプに陥っているということが出来る。相手を見るその見方の点で、ステレオタイプを受容していたという意味で、ステレオタイプに陥っていると言える。これを積極的ステレオタイプと呼ぶことにする。これに対してもう一つの意味は、自分自身がそのタイプになっているということである。例えば、先程の章で説明した Aunt Jemima や Sapphire や娼婦に自分になっていて、従順であったり、忍耐強くあったり、男の性的欲求に単に応えるだけになったりして、そのステレオタイプの女性の特徴を実践していると言う時である。このタイプを受け身的ステレオタイプと呼ぶことにする。第一の意味の時も第二のその時も心の中にステレオタイプがあるという点で不可分のものであるが、第二は自分に対してそれを実演することを強いているのに対し、第一は相手に対してもステレオタイプを強いているという点で区別して考えることも出来る。

積極的ステレオタイプは今までかなり明確な形で指摘され批判もされてきた。白人が黒人に対して行ってきた人種差別も、白人が積極的なステレオタイプの実践者だったことを示している。黒人とはたとえどんなに僅かな黒人の血が混じっている場合でも、黒人としての烙印を押すことにしていたし、黒人であれば、たとえどんなに有能であろうと劣等な存在として扱うことにしていた。こういった意識構造が実は黒人の中にもあると Alice Walker は考えているようだ。

黒人の男性が積極的ステレオタイプの実践者として描かれている。彼らの主な相手は黒人の女性であったり子供であったりする。彼らの中には黒人の女性や子供とはこうあるべきだというイメージがあり、それに沿って彼女達を規定しようとしているところがある。*The Third Life of Grange Copeland* に登場する主要な黒人男性である Grange にしても Brownfield にしても、彼らの回りの女性や子供に有無を言わせずに従わせようとするところがある。Grange がまだ Georgia の Green County というところにいる時の相手は妻の Margaret である。彼にとって彼女は犬同然であった。彼は女とは耐えるもので、子供を生み育てるもので、男に所有されるべきものという先入観念があり、そうなることを Margaret に要求した。自分が所有しているものという意識があるからこそ、彼は彼女に借金のかたに体を売らせようと思えることもあった。

Grange の相手は子供の Brownfield であることもあった。彼は Margaret に対して持っていたのと同じ気持ちを子供に対しても持っていて、子供の言うことに耳を傾けるということとはなかった。Brownfield が北部に行きたいという希望を言っても Grange の肩をすくめる動作一つでその希望は断たれてしまうのであった。彼は子供にすら愛情をかけることはなかった。

Brownfield も最初のころ Grange とまったく同じ生活形態をとっている。彼は最初 Mem と生活し始めた時新しい生活を創造出来るかに見えるが、彼が将来の為といって彼女と一緒に始めた sharecropper の仕事に取り掛かるころから彼の生活はすっかり狂ってしまう。Grange が Margaret に対したのと同じように、Mem に従順で、盲目的であり、自分の所有物的であることを彼は要求する。彼の中には女とはこうあるべきだというイメージがあったからである。

Brownfield が子供に対する態度も、Grange が Brownfield に対して取って来た態度と変わらない。子供は父親にたいして無抵抗であり口応え一つすることがなく、いつも父の存在にびくついている。Brownfield は子供に愛情を示すことはなく、暴力的で抑圧者のイメージを持っている。

この二人の黒人男が女や子供達に暴力的で、自分の描くイメージを強要している遠因について考えてみると、彼らの中に男というものが感じられないからのように思える。それは両者が女や子供にたいして同じ反応を示していることと、両者を取り巻く同じ環境が呼応しているからである。両者共に sharecropper としての身分を持ち、それを始めた時は、夢に胸を膨らませ、陽気で、将来的展望を持っていた。しかし、年月が経つにつれて彼らを取り巻く環境は悪化を極める。彼らには借金がかさみその身分から抜け出せない状態になって行く。そして子供や妻に対して厳しくあたり愛情に欠ける冷たい家庭になって行き、暴力的になり、最後は、妻

が死亡するという筋書きである。Alice Walker は、おそらくこういったほぼ共通する筋書きを Grange と Brownfield に重ね合わせる事で、彼らの運命の共通性を際立たせ、かれらの陥っていた状態を示そうとしたように思える。即ち、彼らは sharecropping system の中に共にあってにっちもさっちもいかない状態になっていたのである。そのために彼らはフラストレーションの爆発という形で妻や子供達に暴力的になっていったといえる。

ではこのことによって何が暗示されているかである。彼らは、自分達の将来を託した仕事が自分達を益々苦しめることになっているということに対してどのように思っているかである。Brownfield を見るとこのことが非常に明確に分かる。彼は Mem よりほとんどすべての面で劣っていたと言っても過言ではあるまい。彼は読み書きが出来なかったし、職もちゃんとしたものは持っていなかったし、決してハンサムという訳でもなかった。Mem は彼に出来ないことが出来た。それでも彼女は彼と結婚した。結婚に至る Mem の最終決意は不明だが、おそらく Brownfield の熱心な気持ちに Mem は期待をかけることが出来たと思ったのであろう、二人は結婚した。Brownfield にしてみると、自分が Mem にかける愛情以外に Mem より勝っているものがないことは分かっていた。それで、彼は sharecropper として働き、一応の成功をおさめることに男としての自分のプライドをかけているところがあった。しかし、彼の最後でたった一つの男という本質確保の望みであった小作農として成功するという夢も、結局破れていく。彼の中には男としての本質確保の道はそれでもって断たれてしまったのである。しかし、それでも彼は男としての自分を感じたいと願ったのである。それで、男らしさを求めて彼の進んでいった方向は、今度は夫と妻という関係であり、親と子供という関係である。それはこの関係は従来より社会通念として主従の関係にあり、どう Brownfield が男が間違おうとも主の位置を占めることができるからであり、同時にこの事は男という本質を確保できるからである。

失われかけた男らしさ確保の為に、主従の関係である所の、夫対妻や親対子という関係で必ず主の位置に身を置ける男は、それだけでも男としての自分が確保出来る。仮にそのままの状態でも確保出来ないとしても、男としての自分を失うことに対する正当化の根拠をその関係の中に見いだすことが出来る。即ち、平たく言うと、女がだめだったのでもう行かなかった、子供が邪魔をしたので、成功しなかったという口実でもって、男らしさを失うことになる言い訳をすることが出来るということである。現に Brownfield は sharecropper として成功しないと分かった段階で Mem に暴力的になるのに加えて、彼女の知的な部分を徹底的に否定し、少しでも自分より劣った位置に彼女を引き降ろそうと必死になる。彼女が自分より勝っているのは困るからである。

His crushed pride, his battered ego, made him drag Mem away from schoolteaching. Her knowledge reflected badly on a husband who could scarcely read and write. It was his great ignorance that sent her into white homes as a domestic, his need to bring her down to his level! (Walker 1970: 55)

最初のころ Grange が Margaret に夜酒を飲んでダンスをすることを教えたり、借金を返すためとは言いながら、Margaret に地主の Shipley と寝るようにほめかしたりすることも、Grange を取り巻く環境が悪化すればする程、彼が彼女を墮落させようとしているということを示すのに使われている。忍耐強く、口応えせず、よく働き、外見的にも美しい方の彼女を、そのままりっぱにしておいては、Grange にとっては困るのである。彼女がいる為に、自分は墮落し、成功しないのだという方向性を取っておかないと、彼の男らしさをほぼ失った心を慰め、癒す手だてではないのである。その為に彼は彼女のりっぱな面をことごとく否定し、彼女が彼の失敗を導き出したという口実を残していないとしないのである。

今のこの黒人男性の男としての自分を保つための考え方は、先に黒人女性に娼婦像をはめ込もうとする白人の考え方と極めて似通った意識構造であることが分かる。白人男性にとっても白人女性にとっても夫の相手である黒人女性がりっぱな黒人女性であり、正当な性的相手であっては困る訳である。これと同じ考え方をして黒人男性は黒人女性に迫ったといえる。自分の妻である Margaret に対して Grange の要求することは、自分の妻である Mem に対して Brownfield が要求することは、娼婦像であり、彼女達の人間性の否定なのである。Margaret や Mem にれっきとした人間性があり、しかも、自分より優れていては、男としての体面を守ることが出来ないからである。彼女達には「娼婦」であってもらわないと困るのである。

今まで、心の中に一定の固定したイメージがあり、それを相手に強要するという意味で、積極的ステレオタイプの実践者という角度から見て来た。このことそのものの指摘には新しさはないが、このことを指摘する時の対象を黒人男性を中心に行ったというところに作者 Alice Walker の新しさがある。

次に受け身的ステレオタイプの実践者達について考えてみる。この人達のステレオタイプの実践の相手は自分達である。ここで言う「受け身的ステレオタイプの実践者」という意味は、黒人本人の中にステレオタイプを受け入れて実践しているところがあるということである。それは外からの眼に見える強制の力によるのではなく、本人が当然の事としてそのステレオタイプを受け入れ、自分はそうであるべしと潜在的に思って、あるいは、知らず知らずの内にそのタ

イプを実践している、こういう意味での、こういう角度から解釈した、黒人の姿を見て行きたい。

このタイプに入る登場人物達は主に女性である。Margaret も Mem も Josie も「黒人女」というステレオタイプを受け身的に実践している。まず Margaret からみていこう。

Margaret は三人の女性の中でも最も忍耐強く、従順で、Grange の言いなりになっていた女性である。息子の教育についても自分なりの考えをもっているが夫に反対されると、思いをすぐに変えているし、北部行きについても彼女自身の希望は北部行きでも、夫の気持ちに合わせてその希望を変えている。Grange の暴力に対する恐怖が多少彼女の夫に合わせる傾向を与えたとも言えないではないが、根本的に彼女の中には、妻とは夫に従うべきものだ、夫を支えるべきものだという観念があったのである。彼女の中に女としての、妻としての、基準が深く入り込んでいて、彼女のその忍従、全受容の女の姿の虜になっていることを物語る事件は、彼女の自殺である。彼女は確かに自殺に至る途中では、一時昔の彼女ではなくなったかに見える。Shipley との浮気にしても、週末の遊び歩きにしても、酒を飲み歩く姿にしても、日曜日の朝歸りにしても、まるで彼女はすっかり人が変わってしまったように見える。しかし実は彼女は全然変わっていなかったのである。

...even when Margaret found relief from her cares in the arms of her fellow bait-pullers and church members, or with the man who drove the truck and turned her husband to stone, there was a deference in her eyes that spoke of her love for Grange... She had sincerely regretted the baby. And now, humbly respecting her husband's feelings, she ignored. (Walker 1970: 20)

彼女の中には依然夫に対する忠誠的愛情心があり、それが為に彼女の中には自分の行動に対する罪悪感のようなものがあることが分かる。(Russell 1982: 27) 彼女の中にあった妻とは夫に従い、夫を喜ばし、夫の言いなりになり、夫の支えになるべしという基準の為に、この罪悪感が生まれて来て、この罪悪感に押し潰されて彼女は自殺してしまったのである。

次に Mem についてみていく。彼女には Margaret の忍従、全受容の女のタイプに加え Sapphire に代表される強い、家庭の中心になって動き回る女性の姿も演じている。最初の Aunt Jemima の特徴は彼女が今までの彼女を総て捨てて Brownfield に身を任せていくことに最も良く表現されている。優秀な才能を捨てて、Brownfield の為にすべてをささげていたにもかかわらず、彼女の、家を建てるという、最も大切な希望すらかなえられないことはもとより、

生活は苦しくなる一方であった。それでも彼女は明るく振る舞っていた。即ち、彼女は自分を殺して、いわゆる、「妻」であることに徹し、夫のために生きていたのである。

いわゆる Sapphire の役を彼女が演じ始める事が最も象徴的に描いてある所は、彼女が彼をピストルで威すところである。まず、彼女が彼をピストルで威す場面から見てみよう。

“Don’t you move a inch, “Mem said lazily, controlling the cool hard gun barrel down between his thighs. (Walker 1970: 92)

この部分から彼女が今までいかに夫という「男」というものに虐げられ、押さえつけられていたかが分かり、彼女の最大の関心事はその男という性から自らを解き放つことにあることが分かる。こうして彼女は一見 Brownfield から解放されるかに見えるが、彼女は女とはこうあるべしというステレオタイプから解放されていない。それは彼女は Brownfield と別々に暮らすことが出来たのに、彼に、従わせる為の10ヶ条の条件の書き込まれた誓約書に署名させ、新しく街のアパートに引っ越し、自分でも仕事を始めていき、いわゆる一家の大黒柱としての役を演じ始めるからである。また、彼女の今度の関心はいかにいい母になるかでもある。このところの彼女の願いを見てみよう。

“I already told you...you ain’t dragging me and these children through no more pigpens. We have put up with mud long enough. I want Daphne to be a young lady where there is other decent folks around, not out here in the sticks on some white man’s property like in slavery times. I want Ornette to have a chance at a decent school. And little baby Ruth... I don’t even want her to know there’s such a thing as outdoor toilets. (Walker 1970: 84)

母親の役が女に与えられた大切な役割の一つであることは、Grange にしても Brownfield にしても、子供の世話を積極的にはみなくて、母である Margaret や Mem にすべてを任せている事でも分かるし、最もこのことが、象徴的に描かれているのは、Mem が子供を生む時である。冬の寒い時、窓ガラスが壊れていて寒風の吹き込む中、暖房用のまきも底をついて、十分な暖をとれないところで、カーテンで仕切った堅いベッドの上で産婆もなく一人でお産をし、その後の処理も充分になされない時、子供に対するすべての役割は女に課せられていたということが、何よりも良く物語られている。この女であるが故に課せられていた役が、男である Brownfield によって強いられているということを考え合わせると Mem は「女」というステ

レオタイプから脱しておらず依然そのステレオタイプを当然のこととして受け入れていたと言うことが分かる。

次に Josie についてみていこう。彼女は妻や母親という視点からの女のステレオタイプには陥っていなかった。即ち、実際彼女は Aunt Jemima でも Sapphire でもなかった。彼女には Lorene という娘がいたが、彼女を生んだのは Josie が売春婦をしている時の事であり、Lorene の父はだれか不明であり、それが為に妻として、Lorene の父親である彼女の夫に尽くそうとするところは彼女にはなく、Josie という妻対夫という関係は描かれていない。また母親の役も Margaret や Mem のよう献身的な面は Josie にはほとんどなかった。

すると彼女はいわゆる「女」というステレオタイプに陥っていなかったかという点で、そうでもない。まず、彼女は男に依存しないと生きられないという点で、「女」のステレオタイプを演じている。彼女のこの経歴は16才で父に勘当されることに始まるが、失われた父の信頼を回復することに必死になる彼女の女の姿は、見知らぬ男の子を身ごもるということで自立したかに見える。しかし彼女には依然父という男を中心に自分の世界を回転させようとする気持ちがあるのである。得られぬ父親という男の世界を求めて、彼女の深入りしていく世界は売春婦の世界であった。そしてさらに満たされぬ気持ちに焦がれて向かうところが Grange との関係であり Grange が北部に行っている間とか、彼が彼女に興味を示さない時は、Brownfield との関係であった。要するに彼女は Grange でなければいけないとか、Brownfield でないといけないということはなかったのである。売春婦も Grange や Brownfield の女としての彼女もあくまで父親と言う、自分を規定してくれる男を求めていたとっていいのだ。この方向性が彼女の中にあった基準であり彼女自身であったのだ。(Christian 1980: 194)

また彼女自身の仕事は何よりも彼女が黒人女のステレオタイプを実践している事が分かるし、彼女が積極的に Grange や Brownfield に言い寄る時の役割も、彼女が娼婦の役を演じている事を示している。彼女の希望は夫を持つことであるので相手は Grange であっても Brownfield であっても良かったのであるが、その夫を持ちたいという気持ち故に Grange や Brownfield の性的いけにえになっているということに彼女は気付くことはないのである⁵⁾。彼女は現実生活では Aunt Jemima でも Sapphire でもないが、献身的という意味では Aunt Jemima 的であり、精神的、肉体的強さを持って荒波を乗り越えて来たという意味で Sapphire 的であったといえないでもないが、彼女の陥っていた所は、何よりも、自分が Grange や Brownfield のフラストレーションの排け口として利用されているということを認識せず、進んで彼らの相手となり、ベッドを共にしているということである。Grange も Brownfield も南部の白人の男のように奉る妻を持っていた訳ではないが、妻との間が行き詰まった時、彼らは Josie のところにやって来ているということは彼女のところに性的慰めを求めてやって来

ていると言うことが出来るのである。また Josie 自身そのことを知っていながら、彼らの性欲を満たす役をしているのである。こういうところから、彼女はいわゆる娼婦の役を自ら進んでしていたことが分かる。

IV. ステレオタイプより脱出の可能性

今までステレオタイプに陥っている2種類の姿についてみて来た。その一つは相手をみる時ステレオタイプに陥った眼で限定的にみて、相手にそれを演じることを要求するもので、もう一つは自分自身をみる時ステレオタイプに陥った眼で限定的にみて、自分にそれを演じることを要求するものであった。

こういった彼らの共通した運命は死であった。Margaret は自らの命を絶ち、Mem も自らの命を絶つかのように Brownfield の銃口に向かって行くことで射殺され、Brownfield は Ruth という娘の扶養権を裁判所で申し渡された時、父の Grange によって射殺されるし、Grange は Brownfield を射殺した後、森の中で自らの命を絶っている。Josie は死という形は取らないが、彼女の愛する Brownfield と Grange を同時に失い死人同様の状態にある。何故彼らの運命はこれ程までに実りのないものになっているかである。

先程の章で彼らがステレオタイプに陥っている姿を説明したが、彼らが完全にステレオタイプに陥っていて、まったくそれから脱出できる可能性がなかったかという点もそういって置けない。彼らには何度かその可能性はあった。まずそのことを見て行き、その後その可能性があったにもかかわらず、彼らの運命が何故死だったのかを見て行く。

5人の主要登場人物の中でも最も脱出の可能性を秘めていたのは Grange であった。彼がまず Shipley のもとを去るのも自分が黒人男としてのステレオタイプに陥ってる元を造っている sharecropping system からの訣別の為であり、同時に Margaret や Brownfield という家族を捨てるということは彼が間違った形で、自分の達成されない男を認識するために使った対象から訣別して、自分を自分の内で見直して、確立していこうとする兆しであった。

しかし実際はこの後の彼の足跡は Josie の経営する the Dew Drop Inn というあいまい宿に潜り込み Josie を慰みの対象にしている。Josie は Margaret とは外見は異なる女性だが、同じく男を中心に生活が回転していた女性で、Grange は Margaret の時と同じ生活のサイクルの中にあっただけになり、彼の脱出は果たされていない。そうして彼は北部へ行き、そこでの脱出の可能性は、池で溺れかけている女性を救おうとする時である。その時到達する彼の認識は、今まで彼の中にあった自己否定の根源は白人の世界にあるのに、今まで自分はそのために尽くしてきた、というものである。池で溺れかけている白人女性に直面する時、彼女が彼を nigger と呼び彼を否定扱いしているにもかかわらず、彼は彼女を救おうとする、即ち、彼

女の為になろうとしていたことが、今までの彼の生活形態を象徴し、救おうとした手を引っ込めて、結局彼女を溺死させることに手をかしたというところで、彼は自分を否定扱いしていたものを受け入れるのではなくて、否定したということを表している。この意味で彼は今までの彼から解放されていく。

The death of the woman was simply murder, he thought, and soul condemning; but in a strange way, a blizarre way, it *liberated* him. He felt in some way repaid for his own unfortunate life. It was the taking of that white woman's life—and the denying of the life of her child—the taking of her life, not the taking of her money, that forced him to want to try to live again. (Walker 1970: 153)

このことで彼は自己否定をもたらした部分、即ち、いくら努力しても生活は悪化するばかりで、結局自分は駄目な存在だと自認せざるを得ない方向に彼を導いた sharecropping system に象徴される、白人が黒人に対して当然のこととして押し付けていた差別とか抑圧、またその意識の部分の否定することができた。彼の解放感にはビガー・トマスがメアリーを殺した時の解放感に似たものが有り、彼にとって自己認識の出発点であったといってもいい。外側からあてがわれていたステレオタイプから、外側からの力を排除することで、彼は、脱出する事ができたといっている。

しかし北部で白人の妊婦を見殺しにした後、次に彼がステレオタイプに陥っていた対象で考えなければならなかったことは、おそらく彼自身が白人と同じようにステレオタイプを相手に強要していた部分である。何よりも自己容認を推し進めて行くには彼の中にある本当に否定すべき面を自ら否定し、取り除いていかないとならなからである。その為には、彼は自分で自分の責任をとることであるといっている。

“And with your pa,” Grange continued, “the white folks could have forced him to live in shacks; they might have even forced him to beat his wife and children like they was dogs, so he could keep on feeling something less than shit. But where was the *man* in him that let Brownfield *kill* his wife? What cracker pulled the trigger? And if a cracker did cause him to kill his wife, Brownfield should have turned the gun on himself, for he wasn't no man. He *let* the cracker hold the gun, because he was too weak to distinguish that cracker's will from him! The same was ture of me. We both of us jumped our responsibility,...”(Walker 1970: 208)

これは彼の中にあった、男としての自分を感じるために、彼が女を利用していたところ——即ち、自分が男らしくなれないのは、女が駄目な為、と責任を女性に転嫁していくこと——を間違いだったと認めているところである。この意味で彼は、このステレオタイプからの脱出も成し遂げていると言える。Ruth という Brownfield の娘を引き取って教育していくのも、彼の言う責任を取る行動の一つなのである。それでも彼は生き残ることができない。何故か。この部分が他の人達にも共通したステレオタイプからの脱出のポイントになっていて、結局死に至るところと思える。それは一言で言うと、彼らの持つ個人の痛みを普遍化できないというところのように思える。このことについて次にみていく。

まず Margaret についてだが、先程彼女については少し述べたが、彼女は酒に溺れたり、朝帰りをしたりして従来のいわゆる「女」というステレオタイプを自分で受容して演じるということをやめたかに見えるが、実は彼女にはそういう認識はなかったように思える。それにそのステレオタイプから自体彼女は脱出できていなかった。彼女は Grange のいわゆる罫にはまっていた。即ち、彼が言うなりに淫らな生活に向かっていたのである。彼女は彼に合わせていたに過ぎない。Shipley の子供を身ごもり Star を生んだ後も⁶⁾、彼女は依然 Grange という男に合わせた行き方を是認するところの彼女の内なる基準を認めることができる。こういう意味から彼女は痛みを普遍化する前の段階でストップしていることが分かる。ステレオタイプに陥っていることを彼女の個人としての痛みとしても彼女には認識出来ていなかった。完全にステレオタイプに押し潰された形になっている彼女である。Mem は少し Margaret と異なっているように思える。彼女は妻という、忍耐強く、従順な役割を拒否し、従来の Aunt Jemima 的ステレオタイプを脱していくが、もう一つのステレオタイプである Sapphire の役を演じるようになっていて、依然ステレオタイプの中にあったことは既に説明した。Aunt Jemima タイプのステレオタイプに陥っている時、彼女はそれを Margaret のように容認していた自分の愚かさに気付いている。即ち、ステレオタイプに陥っている痛みを個人の痛みとして認識することができた。しかし彼女がタイプとしては異なるが同じステレオタイプの中に次に陥るといことは、彼女の中にその痛みに対する見識眼が近視眼的であり、黒人の女に負わされているところのステレオタイプが造り出す痛み、として認識することが出来なかったからである。Mem は Margaret より一步前進したタイプの女性であるとは言え、依然黒人女性が負わされていたステレオタイプの虜になっていて、その為に死んで行くという点では変わりはないといえる。

Brownfield はどうであろうか。彼は幼いころから父と母の不仲を見て来ているし、その結果がどうなるかも見て来ていたにもかかわらず、父と同じ運命をたどる。sharecropper にな

り、経済的に苦しくなり、妻を暴力的に扱い最後に殺す。Grange と異なる点は、彼は一度 Mem に支配されるということである。彼は、Mem に支配されるということで Mem をいわゆる「女」というステレオタイプで見なくなることを期待させるが、依然ステレオタイプでもって彼女を見ていた。即ち、彼女を彼が虐げる対象——フラストレーションの排け口として、忍従することを要求する姿——としては見なくなったが、彼を駄目にする対象として見るという点では「女」として彼女を見ていた事になる。即ち、彼の女性に対する態度は基本的には何も変わっていなかったのである。彼は Mem を殺して刑務所で刑をつとめている時、認識の上でステレオタイプから脱出する可能性を覗かせている。即ち、彼に覆いかぶさっている苦しみを認識しその苦しみの構造面からの解明ができそうな言い方をする。また Grange も Brownfield にはそうするチャンスはあったと指摘している。また Ruth を何とか自分の手にしたいという気持ちの中には、自分の間違いを認め、Mem に謝りたいという気持ちが含まれていたからでもある。

Brownfield ground his teeth under pressure of his error, though too much thought about it would make it impossible to sleep. It occurred to him, as an irrelevancy, that Ruth might never believe "conditions" caused his indifference to her. He wished, momentarily, that he *could* call out to someone, perhaps to Mem, and say he was sorry. (Walker 1970: 227)

それでも彼が最後に Grange に殺されるのは、彼の中に苦しみとか痛みに対する本当の認識がないからだと言える。彼の今の引用のように一方では自分の犯した罪に気づき始めているように見え、他方では Ruth を得るために判事を買収する行為を行っていることからしても、今までの行き方のサイクルから外に出ようとはしない事が分かる。

Grange の死は最も Walker の手厳しい裁定だったと言わなければならないが、彼女の考え方の根底にあたることに抵触する為に、最も生き残りの可能性を持ちながらも、どうしても死なないといけな運命になる。それは覆いかぶさる苦しみや痛みを彼個人としての苦しみや痛みとして認識でき、それが黒人故に彼に覆いかぶさっていたと考えることが出来ても、彼にはそれを普遍化することが出来ないからである。北部での認識は彼の開眼をもたらしたが、その時彼の運命は決まっていたように思える。

Two things and two only he wanted when he came back to Baker County. Independence from the whites, complete and unrestricted, and obscurity from those

parts of the world he chose. (Walker 1970: 140-141)

こうして彼が Baker County に帰って来てとった行為は Ruth を引き取り、Josie の援助を受けて、農園を買い取り、回りにフェンスを張り巡らして、Ruth と二人だけの、世間から遊離した “hermit” (Walker 1970: 193) を思わせる生活をおくることであった。しかし、彼の行ったこの行為は彼と Ruth にのみに通用する生活で自己満足の域を出ていないということができ、この意味で彼は生き残りの権利を失うのである。

V. 生き残りの条件

The Third Life of Grange Copeland の中で生き残る可能性を持っているのは Ruth ただ一人である。今度は Ruth を中心に、生き残るには何が必要なのかについて見て行きたい。

生き残りの条件の一つはステレオタイプからの脱出にあるように思える。Ruth はこの意味からいって従来のステレオタイプにはまっていない女性として描かれている。まず彼女は従順でない。4 才にして父親の Brownfield に口応えし、父を罵倒している。彼女の姉の Daphne や Ornette と際立った違いを見せている。また、彼女はむしろ反抗的面を持ち合わせているといっている。父に対してはもとより、学校の先生の Mrs. Grayson が鞭を振るおうとするこゝにも敢然と立ち向かって行き、文句を言い罵倒している。それは、彼女の中に自己否定でなく、自尊心があるからである。今までの黒人、特に黒人女性が回りからの圧力に屈して自己否定的であったことと比べると彼女の自己容認の姿勢は一層際立つ。また彼女は盲目的でもない。Margaret は夫の Grange を信じるという点で盲目的だったし、Mem は、自分の発展という点で、子供に教育を施し、都会に立派な家を持つことだと信じ切っていたという点で盲目的だったし、Josie は自分を生かすには男しかいないと考えて、結婚する事だけを願っていたという点で、盲目的であった。Ruth にはこの盲目性はなく、Grange の教示しようとする歴史の定義についても疑問を示している。それは彼女が物事にたいして敏感であることも示している。彼女は Grange の定義する白人の非人間的な面に関しても、固定した見方をすることを否定する意見を述べている。ある一定の固定したことをそのまま受け入れるのではなく、敏感に、問題意識を持って取り組もうとするところが彼女にあったということが分かる。また彼女には、将来的なパースペクティブがあった。しかもそれが彼女の個人的な面からだけでなく、社会の中での彼女の立場、置かれている位置などに対して彼女の興味が向いていたことが述べられている。それに他の女性となによりも異なっている点は彼女が Ruth という個人に止どまらず自分は「女」であるということを強烈に認識していたことである。このことを引用してみよう。

What scared her was that she felt her woman's body made her defenseless. She felt it could now be had and made to conceive something she didn't want, against her will, and her mind could do nothing to stop it. She was deathly afraid of being, as she put it, "had," as young girls were every day, and trapped in a condition that could only worsen. (Walker 1970: 193)

今の引用から彼女は「女」であるがために無防備で所有され悪い状況に置かれることになるかもしれないという危機感を持っているところが分かる。こういう普遍化したとこでの自己認識が Ruth にはあった。

ステレオタイプからの脱出ということは従来の固定した観念に捕らわれないと言うことからして、広い意味でいえば既成の価値基準に捕らわれないという言い方をすることができる。ステレオタイプからの脱出を登場人物に試みさせる Alice Walker の意図はこの既成の価値基準に捕らわれない人物になるというところにあるように思える。例えば Ruth を除いて最も生き残りの可能性のあった Grange がどうしても、もう一步踏み出せなかったのは、考え方の普遍化への踏み出しが出来ないためであったが、彼のこの原因は、彼の中に色による区別をする人種差別主義の面が少し残っているところがあり、これが為に、可能性を求めた団結とか連帯という方向に向かえなかったのである。Grange が Ruth に白人と遊ぶことを禁じる時、彼の限界を見てとることができるのである。この白とか黒とかという色の枠自体が人間を判断する時の旧来の価値基準であり、これを越えることの必要性が Grange の死の意味であったと思える。

Grange と Ruth の近親相姦を思わせる愛の形もこの既成の価値基準を越える可能性を示す例のように思える。二人の間が明確な形での男と女の愛だと示されていないが Ruth が怪我をした時 Grange が彼女の指の傷に自分の指にも傷をつけて血を出し、傷と傷を合わせて、インディアンに行うといわれる blood brother の儀式をすることとか、Ruth が、Grange に愛情を示す Josie に jealousy を感じる事など、二人の関係が近親相姦の関係だと匂わせるところがいくつもある。近親相姦は当然のこととして禁断の関係で、いわゆる既成の価値基準では否定的にとらえられるものである。この題材の良し悪しは別として、この近親相姦の関係を扱うことで、従来からあるものに対する見直し、問い直しの大切さを示そうとしていることが分かる。しかも従来否定的に扱われているものの問い直しが最も大切なことのひとつと考えられているようである。

従来の既成の価値基準にとらわれているということは、自由でないということである。黒人は本来肉体的に自由でなかったが、精神的にも自由かどうかということを考え直してみる必要があるといえる。即ち、既成の価値基準に捕らわれることのない心の自由を獲得することが重

要なことと思える。

第二の条件としては、人間同志の絆の大切さを上げることが出来る。Grangeの死を考えても、彼が最も生き残りの可能性を持っていながら、死ぬ運命にあったのは、この他との連帯の可能性を持っていなかったからであった。Alice Walkerの考えていた方向性は、おそらく第一の条件であるステレオタイプを脱した心の自由な状態にたった人間が絆で結ばれたところであるように思える⁷⁾。だから単にステレオタイプから脱出するだけでは生き残ることはできない。Grangeの死がそれを明確に物語っている。ステレオタイプからの脱出をいかに生かすかというところが生存のポイントとなるのである。

もう一度Grangeを含めて他の登場人物を見直してみると、共通する点は皆孤立した状態にあったということである。GrangeはBaker Countyに戻って来ると自ら進んで孤立状態を造り出そうとして、家の回りに柵を巡らせてRuth以外他のだれもその敷地に入れまいとしているかのようであった。作品の初めに登場するStarやBrownfieldの子供のころのことを考えてみるのもいい。またBrownfieldの子供のOrnetteやDaphne、またJosieがまだ青春時代のことを考えてみてもいい。彼らは一様に愛情に飢えている。父親は子供達のことを顧みず、自分かってな行為に徹し、母親は父親のことばかり考え子供の心の動きに気を配る気持ちなどはほとんどないようである。Memも子供のころいわゆる不貞の子として生を受けていることから、父親の愛情を全然受けることはできなかったし、早くして母親と死に別れ、愛情に飢えていたといっている。

子供だけでなく、成長して大人になっても彼らの孤立状態は続いている。GrangeにもBrownfieldにもMargaretにもJosieにもMemにも皆心を開いて相談出来る相手がいないし、苦しみを、仮に一時的にでも、癒す為に逃げ込んで行ける所も人もいないのである。こういった彼らに比べてRuthの場合は状況が異なっている。彼女には愛情をかけてくれるGrangeがいたし、父親のBrownfieldも、他の娘のDaphneやOrnetteに対して示さなかった愛情をRuthには示している。この意味で彼女は孤独ではなかった。それに加えて、彼女自身にも絆を求めるところがあった。このことは彼女が社会的な動き、特に公民権運動や学校などでの人種統合に興味を示していくことに表されている。Baker Countyで初めて運動を見た時の印象を彼女は次の用にいっている。

She felt her heart give a kind of bump against her ribs, such as she'd never felt before. (Walker 1970: 236)

その後も彼女はQuincyという運動家からleafletを受け取り心の高なりを覚えているし、さ

らには Quincy や彼の妻の Helen が他の白人の運動家と共に Ruth を訪問することも Ruth の外への広がりの可能性を十分に示している。この広がり人間と人間の絆の大切さを物語っているものと思える。特に中でも、この絆が単なる黒人の連帯でなく人間同志の連帯を暗示しようとしているという点で第一の生き残りの条件と重なってくるところである。即ち、Quincy と Helen に伴って来る二人の Bill と Carol の白人運動家は、従来の色による価値判断に対する挑戦の証なのである。旧来の間違った価値基準、即ち、ステレオタイプを乗り越えたところで人間としての絆をしっかりと結んでいくことの重要性を暗示しているといっている。Ruth の興味からして彼女はこの可能性をもっているのである。

VI. お わ り に

こうしてみると *The Third Life of Grange Copeland* の中で Alice Walker が大切に考えようとしていたことは人間の心の問題だと言うことが分かる。例えばステレオタイプからの脱出の問題に関しても、その中の一つの、女性を蔑視する傾向を戒める点、白人黒人の中に見られた colorism に対しても、外圧により自分の中に自分を否定する傾向が出て来る点も、総て心の問題を Walker が扱おうとした証である。その中でも、人間の心の中にある、潜在的に支配しているもの、私達が日常的に知らず知らずのうちに依存している意識構造に関心を示していたといっている。そのため、彼女は人種差別の問題と男女差別の問題を同じ差別のレベルでとらえ人間の意識を支配しているものという共通項として認識しているものと思える。

こういった差別意識構造に支配されている時の人間の状況も彼女の興味の対象であった。差別意識という、言わば、借り物の意識構造故に、あくまで自己が成立していないと考えていた訳である。自己が成立していないという意味では、依然奴隷と同じように何かに支配されているということであり、ここに奴隷の支配という考えから派生するところの「考え方の支配」という面に眼を向けられる。奴隷が肉体的に支配されて自由でなかったように、自己の成立していない人は、いわば、精神的に支配されている訳で、同じ自由でないといえることができる。Grange 達ステレオタイプに陥っていた人達は皆この不自由を持っていた訳である。こういうふうにかんがえると、Walker が人種を越えて人間の心の問題を扱っていた事が分かる。

恐らく、ここまでは *The Third Life of Grange Copeland* の中で問題のないところであろうと思われるが、それではそういう考えを実現する時どうなるかという面になると説得力に欠けるといえることができる。あるインタビューで Walker 自身がいつているように、彼女の考え方は、*The Third Life of Grange Copeland* に始まり *Meridian* を経て *The Color Purple* に受け継がれ、深められて行くということなので⁸⁾、やむおえないことなのかもしれないが、考え方の実現に伴うべき精神的基盤が不明確だといえることができる。Grange が南部帰還や Ruth の

南部への愛着で、南部をその対象にしようとしていることは分かるし、彼女自身も *In Search of Our Mothers' Gardens* の中でも⁹⁾ そう述べている。しかし、*The Third Life of Grange Copeland* の中で、何故南部なのかという事が、例えば James Baldwin の *Go Tell It On the Mountain* などに見られるようなスムーズな形では作品を通して納得することが出来にくいのである。(但し、北部では駄目だとは示してある。) もう一つは考え方の実現の結論部分の役を Ruth が負っているところに問題があるように思える。彼女には、それに至るところの精神的苦しみは、どの他の女性に比べても、実はないのに、実現の可能性が一番高いということは不可思議なところである。何故彼女が姉たちより敏感なのか何故南部を愛せるのかなどに説得をもたらす場面は決して多くはない。

こういった不足の面はあったにしても、Walker は *The Third Life of Grange Copeland* で一応の到達点として、ステレオタイプという既成の価値基準を脱することの大切さを知り、黒人のスタートとして、人間同志の絆の大切さを認識する所まで来たといっている。

Notes

*当論文は1987年5月30日、中・四国アメリカ文学会月例会（於広島大）での口頭発表の原稿を加筆・修正したものである。

- 1) Baldwin(1955: 20-21) にも Aunt Jemima の記述がある。
- 2) Wright(1940: 9-39) では、“How ‘Bigger’ was Born” という introduction があり、その中で5つの Bigger の類型が提示されている。Bigger がこの5つのいわゆる「悪い」黒人の総体であることが示されている。
- 3) 黒人女性のタイプについてさらに詳しい説明は次のものが参考になる。Christian(1980) と風呂本(1986)。
- 4) Baldwin は黒人男が男として生きることが非常に困難な状況がアメリカにあるという認識を持っている。この面の分析に関しては前川(1986)を参照されたい。
- 5) Wade-Gayles(1980: 131) は次のように言っている。She is a prisoner, then, continually executed by the male community's assessment of her as a sex object.
- 6) 本文中では明確に Shipley の子供だと記してあるところはないが、おそらく Margaret の交際範囲からして、Star は Shipley の子供と思える。Byerman (1985: 131) も Shipley の子供として指摘しているし、Wade-Gayles (1984: 132) も同じ指摘をしている。
- 7) Walker (1983: 194-195) では特に北部での黒人の絆が失われてきていることが指摘してある。
- 8) インタビューの出所は不明だが、加藤(1986: 71)によると本文に説明した主旨のことを Walker はインタビューで言っているということだ。
- 9) Walker (1983) の中でも特に “Choosing to Stay at Home: Ten Years after the March on Washington” (158-170) で Walker が足場を南部の文化や経験に求めようとしていることの基本姿勢を窺い知ることができる。

References

- Baldwin, James. 1953 *Go Tell It on the Mountain*. Dell Publishing Co., Inc.
 ———. 1955 *Notes of a Native Son*. Bantam.

- Byerman, Keith E. 1985 *Fingering the Jagged Grain: Tradition and Form in Recent Black Fiction*. The University of Georgia Press.
- Christian, Barbara. 1980 *Black Women Novelists: The Development of a Tradition, 1982-1976*. Greenwood.
- . 1985 *Black Feminist Criticism: Perspectives on Black Women Writers*. Pergamon Press Inc.
- Cooke, Michael G. 1984 *Afro-American Literature in the Twentieth Century: The Achievement of Intimacy*. Yale University Press.
- Friedan, Betty. 1963 *Feminine Mystique*. Dell Publishing Co., Inc.
- 風呂本惇子, 1986『アメリカ黒人文学とフォークロア』, 山口書店。
- 浜本武雄他, 1987『英語青年 4月号——特集: 現代アメリカ黒人女性作家』, 研究社。
- 加藤恒彦, 1986『アメリカ黒人女性作家の世界——小説にみるもう一つの現代アメリカ』, 創元社。
- 前川裕治, 1986「ボールドウィンの女性達」, (広島女学院大学論集, 第36集)。
- Miller, Baxter R. ed. 1981 *Black American Literature and Humanism*. The University Press of Kentucky.
- Pryse, Marjorie et al. ed. 1985 *Conjuring: Black Women, Fiction, and Literary Tradition*. Indiana University Press.
- Rubin, Jr., Louis D. et al., ed. 1985 *The History of Southern Literature*. Louisiana State University Press.
- Russell, Kaye Lynda. 1982 "The Dilemma of Black Women in the Fiction of Alice Walker." MA thesis at Stephen F. Austin University.
- Tate, Claudia, ed. 1983 *Black Women Writers at Work*. The Continuum Publishing Company. (高橋茅香子訳, 1986『黒人として女として作家として』, 晶文社)
- Wade-Gayles, Gloria. 1984 *No Crystal Stair: Visions of Race and Sex in Black Women's Fiction*. The Pilgram Press.
- Walker, Alice. 1970 *The Third Life of Grange Copeland*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- . 1972 *In Love and Trouble*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- . 1976 *Meridian*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- . 1981 *You Can't Keep a Good Woman Down*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- . 1982 *The Color Purple*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- . 1983 *In Search of Our Mothers' Gardens*. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Wright, Richard, 1938(1965) *Uncle Tom's Children*. Perennial Library.
- . 1940(1972) *Native Son*. Penguin Books Ltd.